

## 今里の浜、今里の蛇巻き

### 今里の浜

**現地の説明板から** 今里の浜は、鉄道交通が発達する明治25年頃まで、大和川船運の寺川筋の船着場でした。

慶長年間(1600年前後)に、片桐且元による亀の瀬峡流(大和川)の開削によって、大阪と大和の物資交易が盛んになりました。今里の浜は寺川上流に位置する川船の港で、東には近世の主要な交通路「中街道」が通っていることから、奈良盆地の物資流通で重要な位置を占めました。

亀の瀬上流の大和へは魚梁船(やなぶね)で、下流の大阪側は剣先船で、大阪から遡行する際には塩、雑貨、肥料(干鰯、油粕)を、大和から下る際には農作物(米、綿、穀物類)を運びました。今里の浜は、これらの物資の荷揚場として、船問屋が建ち並び、問屋町田原本の外港として多いに栄えました。



**亀の瀬峡流を越えて** 魚梁船というのは奈良の川底の浅い川に適したように作られた、長さが約15m、幅約1.5mほどの川船で、立野村(現三郷町)の安村喜右衛門が一手に支配して、奈良盆地のあちこちの川港で活躍しました。

今里の浜で何艘かの魚梁船に積まれた大和の米や野菜は、寺川の流れを下って結崎のあたりで西に大きく曲がり込むと、島の山古墳の少し先の河合町のあたりで大和川に合流します。大和川はそこから飛鳥川や曾我川、葛城川、さらに北から富雄川や竜田川を合わせて、王寺町に入り、そこから一気に亀の瀬の渓谷に流れ込みます。魚梁船から剣先船に積み替えられたのは、大阪と奈良の県境の河内堅上のあたりででしょうか。大阪の柏原に入ると後は河口までゆったりとした流れが続きます。大和川の河口で夕日と沢山のかもめ達に迎えられて木津川に入り、難波から横堀川を、そして天満の市に運ばれたのでしょうか。こんな歌に迎えられて

ねんねころいち 天満の市は 大根そろえて 舟に積む  
舟に積んだら どこまで行きやる 木津や難波の橋の下  
橋の下には かもめがいるよ かもめ取りたや 網ほしや  
網がゆらゆら 由良のすけ (大阪のわらべうた 天満の市)

## 今里の蛇巻き（じゃまき）

今里の「杵築神社」の境内にある榎の古木には、麦なわで編んだ巨大な蛇が絡みつき、参拝者を驚かせます。これは毎年六月の第一日曜に行なわれる「蛇巻き」神事で使われたもので、この祭りは野の神に豊作を祈る野神（のがみ）神事の一つとして、今里の町に伝わっているものです。こんな由来があります。



昔、今里に雄の竜がいて、村中の若い娘を食い、果ては農作物まで食い荒らした。一人の僧が通りかかり、村人に「五月の節句に、しょうぶで太刀をつくって家々に飾るとよい」と教えた。竜は驚いて中街道（下つ道）の榎の木の上に隠れた。

**六月の第一日曜に** さて、神事は蛇を編むための大麦を当屋が作る場所から始まります。その年、当屋に当たった家では、自分の田の一部を割いて大麦を植え、五月に収穫、この日のために麦わらの用意をします。

祭りの前日には、地域の子供たちが神社に集まって柳の小枝を削り、クワや鎌、梯子など農具の小さな模型を十個と絵馬を一枚作っておきます。

当日、当屋の人たちと少年たちが麦わらやわら縄、細竹などを使って蛇を編み始めました。少年たちはその年選ばれた15歳から17歳ぐらいの少年です。

まず頭を作ります。麦わらの束を三つ編みにして同じものを五つ束ね、縄で巻くと頭が出来あがります。完成した頭は拝殿の軒下に固定して、太縄二本を差し込み、今度は縄の間に麦わらを差し込んで胴体を作ります。こうして一時間ほどで、巨大なわらの蛇が起き上がります。

蛇が出来ると、当屋と少年たちは拝殿に上がり、固定してある蛇の頭に酒をかけて飲ませたあと、残りのお神酒を車座で飲むといよいよ出陣です。拝殿から下ろされた蛇を、少年たちと当屋の人たちが担いで、今里の町を練り歩くのです。

町を回った後、神社に戻ると、蛇の頭を榎の木の枝に掛け、幹に沿って右回りに巻かせます。頭を掛ける枝まではビルの三階ぐらいの高さがあるので、今はクレーン車で挙げていますが、昔は少年たちが協力して挙げたといひます。

無事掛け終わると、農具の模型を乗せたさんぼう（三方）と絵馬を榎の木の下にある小さな祠に収め、当屋と頭持ちの少年が祠の前に敷いたゴザに座って簡単な直会（なおりい）をして、祭りは終りを迎えます。

「昔は子守や奉公に出ている子供たちが頭持ちに当たると、休みを貰って帰ってきたものです。それだけこの行事は大切にされていました」

（参考資料）現地の掲示板、大和の神々（奈良新聞社）、インターネット